

研究助成 平成22年度 報告書

財団法人 黒潮生物研究財団
理事長 深田 純子 殿

作成日のみ記入して下さい
作成日 平成23年 2 月 11 日
受領日 平成23年 月 日

貴財団の研究助成により、下記の成果を上げましたので報告いたします

助成者対象者氏名(ふりがな)	岡本 慶(おかもとけい)
----------------	--------------

学生の方はここに記入してください

学校名	東京大学大学院	学部 学科 講座 等	農学生命科学研究科
学 年	修士2年	区 分	卒研(修研) 博研・その他()
指導教官 氏 名	亀崎 直樹	指導教官の所属・職	東京大学大学院農学生命科学研究科客員准教授

一般の研究者の方はここに記入してください

所属		職名	
最終学歴		学位等	

研究課題名	<i>Chelonia</i> sp.の出現記録の整理と黒潮流域のアオウミガメとの形態比較
助成を受けた研究内容について、学会等での発表、学術誌等への公表を行った場合には、下欄にその内容(講演の場合:学会名、期日、タイトル、発表者名等、著作の場合:著者、発行年月、タイトル、雑誌名等)を記入して下さい	
第48回日本爬虫両棲類学会、2009.11.7-8、日本沿岸におけるアオウミガメ <i>Chelonia mydas</i> の亜種クロウミガメ <i>C. m. agassizii</i> の発見状況、岡本慶・田中宇輝・石原孝・亀崎直樹 30th Annual Symposium on Sea Turtle Biology and Conservation, 2010.4.27-29, Occurrence of Black Turtles, <i>Chelonia mydas agassizii</i> , from the Green Turtle complex in the Feeding Ground around Japan., Kei OKAMOTO, Masayuki ISHII, Takashi ISHIHARA, and Naoki KAMF7AKI	
第49回日本爬虫両棲類学会、2010.10.9-10、日本沿岸におけるアオウミガメとクロウミガメの形態比較、岡本慶・亀崎直樹	
第21回日本ウミガメ会議(田原会議)、2010.11.27-28、アオウミガメとクロウミガメ 形態は違うのか?、岡本慶・亀崎直樹	
岡本慶、2011年1月、日本沿岸におけるアオウミガメ属 <i>Chelonia</i> の形態変異と保全に関する研究、東京大学大学院修士論文	

研究の内容(研究成果)報告書の作成要領

- ・研究成果をA4の用紙1枚にまとめて下さい。
- ・言語は日本語とします
- ・1行目に研究課題名、2行目に研究の実施者名(助成対象者名に 印をつける)を記入してください
- ・以下は図表、テキスト等、自由にレイアウトして結構です
- ・報告書は、一太郎2007、花子2007、MS-Word 2007、MS-Excel 2007、MS-PowerPoint 2007、Adobe-Photoshop CS2、Adobe-Illustrator CS2、Adobe-Acrobat 8.0で表示可能なファイル形式で作成してください
- ・特殊なフォントを使用される場合は、埋め込んで下さい
- ・成果報告書は当財団のホームページ等に公表しますので、著作権やデータの取り扱い等には十分ご注意ください
- ・報告書(この紙と成果報告書の2枚)は、出力したものを郵送した上で、ファイルを電子メールまたはCD等の媒体に納めてお送り下さい
- ・電子メールでお送りの場合、添付ファイルのサイズは数100KB程度までにしてください

・提出期限は平成23年2月15日とする

Chelonia sp.の出現記録の整理

日本近海からアオウミガメ属*Chelonia*のウミガメ110個体（生体73個体、死体37個体）を収集した。外部形態の観察を行なったところ、内24個体に通常の個体と異なる特徴が認められたため、これを*Chelonia* sp.として、通常の特徴を持つアオウミガメ*C. mydas*と区別した。なお、*Chelonia* sp.とみなした個体には以下の特徴がみられた。(1)背甲後部における甲幅が狭くくびれたようになっている。(2)腹甲全体あるいは辺縁部が灰色から黒色を呈する。(3)背甲がドーム状に盛り上がっている。1997年に八重山諸島で初めて発見されて以来、これまでに日本近海で確認された*Chelonia* sp.は、標識放流個体の再発見例を含めると24個体28例であった。発見時の状況は、沖縄県のウミガメ漁による捕獲8例と魚網に入網した混獲13例、海岸に漂着・漂流した5例、海上、海中にて遊泳個体を観察した目撃2例であった。また確認された24個体の内標準直甲長(SCL)の計測値が記録されていた20個体のSCLは最小が438mm、最大が919mmであった。これはこれまでに明らかにされた日本沿岸に生息するアオウミガメのSCLの組成（平手，2000；武内，2008；岡本，2009）と大きな違いはなく、成熟サイズがアオウミガメと大きな差異がないとすれば、未成熟から成熟個体までのサイズの*Chelonia* sp.が出現していることが明らかになった。

Chelonia sp.と黒潮流域のアオウミガメとの形態比較

2009年4月1日から2010年12月31日までに高知県室戸岬の大敷網と刺網において、アオウミガメ98個体、*Chelonia* sp.1個体が、三重県紀北町の島勝大敷では115個体のアオウミガメが混獲された。これらの内、室戸ではアオウミガメ25個体と*Chelonia* sp.1個体、島勝ではアオウミガメ18個体について図1に示した16カ所の計量形質の計測を行なった。これらに加えて、アオウミガメは本州・四国・九州沿岸で得られた21個体、八重山諸島で得られた22個体、*Chelonia* sp.は日本沿岸で得られた14個体についても外部形態の計測を行ない、合計でアオウミガメ86個体、*Chelonia* sp.15個体について計測を行なった。なおアオウミガメは、Hamabata *et al.* (2009)により、本土、八重山の地域間でmtDNAハプロタイプが多様度が異なっていたため、本研究でもそれらの2群に分類した。これら本土、八重山のアオウミガメおよび*Chelonia* sp.の3群について、外部形態の変異を明らかにするため、正準判別分析を行なったところ、アオウミガメの2群と*Chelonia* sp.は第一正準軸において明瞭に区別されたが、アオウミガメの2群間では第一・第二正準軸のどちらにおいても区別されなかった（図2）。これによりアオウミガメの2群間の形態の差異よりもこれらの2群と*Chelonia* sp.との間の差異がより明瞭であることが明らかになった。また、それらの判別に有効であった形質は寄与度の高い順にM10、M11、M7であった。

以上の結果から*Chelonia* sp.の正体を明らかにするために過去に太平洋を模式産地として記載された*Chelonia*の記載文と照合したところ、Bocourt(1868)によって記載され、現時点では*C. mydas*の一亜種とされる*C. m. agassizii*と「背甲後部の甲幅が急激に狭くなる」という点で一致した。よって、*Chelonia* sp.は*C. m. agassizii*である可能性が強く示唆された。

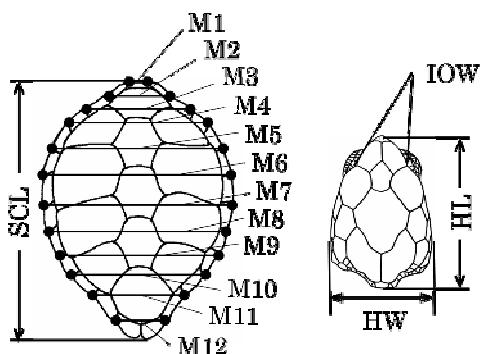


図1. 計測形質

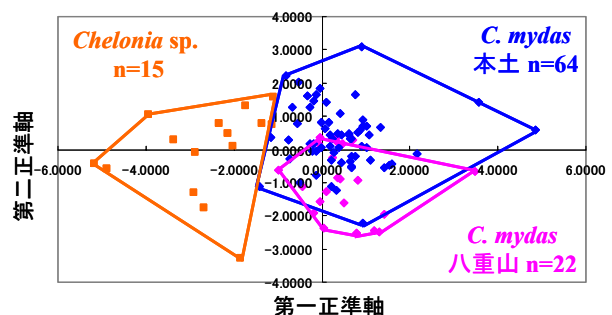


図2. アオウミガメとクロウミガメの正準判別分析結果